A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

43

小林秀雄

中央公論社

日本の文学　43　©1965

小林秀雄

昭和40年11月5日初版発行
昭和45年2月25日13版発行

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷　株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　協和製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

私の人生観　7
プラトンの「国家」　46
歴史　53
言葉　60
忠臣蔵Ⅰ　66
忠臣蔵Ⅱ　72
プルターク英雄伝　80
福沢諭吉　87

ギリシアの印象 96
ピラミッド 103
モオツァルト 106
「罪と罰」について 142
ランボオ Ⅰ Ⅱ Ⅲ 185
志賀直哉 215
菊池寛文学全集解説 226
中原中也の思い出 235
当麻 241

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

無常という事 243
徒然草 246
平家物語 248
西行 250
実朝 260
蘇我馬子の墓 278
近代絵画 287
ボードレール 287
モネ 296
セザンヌ 304
ゴッホ 339

ゴーガン 354
ルノアール 372
ドガ 391
ピカソ 404
常識について 459
注解 486
解説 大岡昇平 512
年譜 527
口絵 小林秀雄肖像 鳥海青児

小林秀雄

私の人生観

この前ここでお話を依頼された時、「私の人生観」という課題を与えられました。急病で御約束を果せず、主催者の方に御迷惑をかけたが、私としては、講演などするより、勝手に独りで病気でもしている方がよほど気が楽だった。今度は、不幸にして急病にもならず、どうも大変重ッ苦しい気持で、こうしてここに立たされているわけであります。

どうも私は講演というものを好まない。だから、今までに随分講演はしましたが、自分で進んでやったことはまずありませぬ。みんな世間の義理とか人情とかの関係で止むなくやったものばかりです。

私が講演というものを好まぬ理由は、非常に簡単でして、それは、講演というものの価値をあまり信用出来ぬからです。自分の本当に言いたいことは、講演という形式では現わすことが出来ない、と考えているからです。無論これは、私の勝手な言い分である。私の人生観から割り出した結論である。政治家は、演説ではとうてい己の政見は発表出来ないなどとは考えない。ヒットラアのような演説気違いになりますと、雄弁術というものが発達すれば書くというような陳腐な表現形式は、将来大打撃を受けるであろうというようなことを「我が闘争」の中で言っております。人によって考えはいろいろであるが、まあ職業というものが別々なのだから、それでよろしいのでしょう。私は、書くのが職業だから、この職業に、自分の喜びも悲しみも託して、この職業に深入りしております。深入りしてみると、仕事の中に、自ら一種職業の秘密とでも言うべきものが現われて来るのを感じて来る。あらゆる専門家の特権であります。秘密と申しても、無論これは公開したくないという意味の秘密ではない、公開が不可能なのだ。人には全く通じようもないあるものなのだ。それどころか、自分にもはっきりしたものではないかも知れぬ。ともかく、私は、自分の職業の命ずる特殊な具体的技術のなかに、そのなかだけに、私の考え方、私の感じ方、要するに私の生きる流儀を感得している。かような意識が職業に対する愛着であります。

天職という言葉がある。もし天という言葉を、自分の職業に対していよいよ深まって行く意識的な愛着の極限概念と解するなら、これは正しい立派な言葉であります。

今日天職というような言葉がもはや陳腐に聞えるのは、今日では様々な事情から、人が自分の一切の喜びや悲しみを託して悔いぬ職業を見つけることが大変困難になったので、多くの人が職業のなかに人間の目的を発見することを諦めてしまったからです。これは悲しむべきことであります。

そういうような次第で、私は書きたい主題はたくさん持っているが、進んで喋りたいことなど何にもない。喋って済ませることは、喋って済ますが、喋ることではどうしても現われて来ない思想というものがあって、これが文章という言葉の特殊な組合せを要求するからであります。もし私に人生観というものがあるとすれば、そちらの方に現われざるを得ない。従って、私の人生観というものをまともにお話することは、うまく行くはずがないから、皆が使っている人生観という言葉についてお話したい。

人生観人生観と解りきったように言っているが、本当はどういう意味合いの言葉なのだろうか。人生という言葉も観という言葉も、非常に古い言葉であるが、両方くっついて人生観というのは、古いことではありますまい。少くとも、この言葉が普通に使われ出したのは、ごく近ごろのことで、やはり西洋の近代思想が這入って来て、人生に対する新しい見方とか、考え方とかが起った時から、人生観という言葉も盛んに使われるようになったのだと思う。しかしそれかと言って、人生観に相当する言葉は外国にはないようです。ある人の説によると、オイケンの Lebensanschauungen が人生観と訳されて以来、人生観という言葉が広く使われるようになったというが、Leben は人生だが Anschauung という言葉は観とはよほど違うようだ。観という言葉には日本人独特の語感があるからであります。

この言葉に非常な価値をおいたのは、言うまでもなく仏教の思想でありましょう。私は仏教の専門家ではないから、常識的なお話しか出来ぬし、折に触れ読みかじったところから判断するから、どうしても得手勝手な考えを、お話することになると思うが、その点は、御勘弁願いたい。

観というのは見るという意味であるが、そこいらのものが、電車だとか、犬ころだとか、そんなものがやたらに見えたところで仕方がない、極楽浄土が見えて来なければいけない。無量寿経というお経に、十六観というものが説かれております。それによりますと極楽浄土というものは、空想するものではない。まざまざと観えて来るものだという。観るということには順序があり、順序を踏んで観る修練を積めば当然見えて来るものだと説くのであります。まず日想観とか水想観とかいうものから

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

始める。日輪に想いを凝らせば、太陽が没しても心には太陽の姿が残るであろう。清冽珠のごとき水を想えば、やがて極楽の宝の池の清澄な水が心に映じて来るであろう。水底にきらめく、色とりどりの砂の一粒一粒も見えて来る。池には七宝の蓮華が咲き乱れ、その数六十億、その一つ一つの葉を見れば、八万四千の葉脈が走り、八万四千の光を発しておる、という具合にやって行って、今度は、自分が蓮華の上に坐っていると想え、蓮華合する想を作し、蓮華開く想を作せ、すると虚空に仏菩薩が遍満する有様を観るだろう、と言うのです。文学的に見てもなかなか美しいお経でありますが、もともとこのお経は、ある絶望した女性のために、仏が平易に説かれたものということになっているので、お釈迦様が菩提樹の下で悟りを開いたのはこんな方法ではなかっただろう、禅観というもっと哲学的な観法によって覚者となったと言われているが、しかしこの観という意味合いは恐らく同じことであろうと思われます。禅というのは考える、思惟する、という意味だ、禅観というのは思惟するところを眼で観るということになる。だから仏教でいう観法とは単なる認識論ではないのでありまして、人間の深い認識では、考えることと見ることとが同じにならねばならぬ、そういう身心相応した認識に達するためには、また身心相応した工夫を要する。そういう工夫を観法というと解してよかろうかと思われます。

禅宗というものが宋から這入って来て拡がった後は、禅観の観の方を略して、禅というようになったが、それ以前の日本の仏教では、むしろ禅の方を略して観と言っていた、止観と言っていたようである。止という言葉には強い意味はないそうです。観をするために、心を静かにする、観をするための心の準備なのであって、例えば、法華経の行者が山にこもる、都にいては心が散って雑念を生じ易いから山に行く、平たく言えばそれが止であります。

止観の法が伝来したのはよほど古いことです。天平時代である。唐招提寺に行かれた方は、開基鑑真の肖像を御覧になっているでしょうが、あの人が支那から伝えたものだそうです。あの坐像は、肖像彫刻として比類なく見事な出来で、もちろん日本一でしょうが、世界一かも知れぬと思われる。瞑目端坐して微笑しているが、実はこの和尚様は眼が見えない。日本の学問僧の懇望によって、日本における仏教の布教を思い立ったのであるが、暴風だとかその他いろいろの障碍のために五回も渡航を失敗している。揚州から薩摩まで来るのに十二年もかかっている。その間に日本の学問僧も死に先方の弟子も死に、和尚も船が南方に流された時病気にかかって失明された。あの国宝の坐像は、そういう坐像であります。彼

が将来した摩訶止観は、今日では、もう死語と化しているかも知れないが、坐像は生きております。あの坐像が私たちに与える感銘は、私たちが止観というものについて、何か肝腎なものを感得している証拠ではあるまいか。美術品というものは、まことに不思議な作用をするものです。

これは絵であるが、坊様の坐像で、もう一つ私の非常に好きなものがあります。これも日本一だと言っていいかも知れませんが、それは高山寺にある明恵上人の像である。御覧になった方も多かろうと思いますが、一面に松林が描かれ、坊様が木の股の恰好なところへチョコンと乗って坐禅を組んでいる。数珠も香炉も木の枝にぶら下っていて、小鳥が飛びかい、栗鼠が遊んでいる。まことに穏やかな美しい、また異様な精神力が奥の方に隠れているような絵であります。この絵は空想画ではないので、上人の伝記を読むと、ほぼこの通りの坊様であったことがわかる。この絵は高山寺の裏山を描いたものだが、木の股でも木の空洞でも石の上でも、坐禅をするには恰好なところには、昼でも夜でも坐っていた坊様です。この裏山で、「面一尺ともある石に、我坐せずといふ石、よもあらじ」と語ったと伝記は言っております。この坊様は戯れに自ら無耳法師と言っていたごとく、絵では少々横を向いているから解らないが、向う側の耳はないのです。まだ二十歳くらいのころですが、こんな安穏な修行をしていては、到底真智を得ることは出来ぬ、と眼を抉ろうとした、しかし眼がつぶれたら経文を読むことが出来ぬ、では鼻にしようかと考えたが、しまりなく鼻水がたれては経文を汚すかも知れない、耳なら穴さえあれば仔細はないと考えて、耳を切りました。そういう烈しい気性の人でしたが、兼好が徒然草で書いている有名な阿字の逸話のように、子供のように天真爛漫な人であった。よく独りで石をひろっては、石打ちをしていたと言う、石打ちというのはどういう遊びかはっきりわからないが、無論石蹴りのような子供の遊びだったでしょう。何故そんなことをするかときかれて、難かしい経文が心に浮んで来てたまらぬからだ、と答えた。若いころから、天竺に行ってお釈迦様の跡を弔いたいという熱望を持っていたが、中年になってからこれを決行しようとしました。いろいろ旧記を調べて印度行の旅程を立てた。この旅程表は今も高山寺に遺っているそうですが、長安の都から天竺の王舎城まで八千三百三十三里十二町、十二町まで調べあげた、一日に八里では何日、七里では何日、五里ずつ歩けば五年目の何月何日午の刻に向うへつく予定である、と書いてある。旅装までととのえたが、春日大明神の夢のお告げがあって、思いとどまった。まあ思いとどまってよかったです。行ったら虎にでも喰われるのが

落ちだったでしょう。天竺に行けなくなって口惜しいので、紀州の鷹島という島で坐禅をした時、海岸の石を一つひろって来た、天竺の水もこの海岸に通じている、仏跡を洗った水はこの磯辺の石も洗っているはずである。してみれば、この石も仏跡の形見である、と言って生涯肌身を離さず愛翫した。死ぬ時には、小石に向って辞世の歌を詠んでおります。「我ナクテ後ニシヌバン人ナクバ飛ンデカヘレネ鷹島ノ石」というのです。きっと石は飛んで帰りたかったに違いなかったろうが、飛んで帰れず、今もなお高山寺に止っている。何もおかしな話ではない。考えようによっては、人間とても同じことだ。人間は何と人間らしからぬたくさんの望みを抱き、とどのつまりは何とただの人間で止まることでしょうか。専門歌人が、こんな歌はつまらぬなどと言っても作者の人格に想いを致さねば意味のないことです。この人は実に無邪気な歌を詠んでいる、ついでに一つあげておきましょうか。「マメノコノ中ナルモチキトミユルカナ白雲カカル山ノ端ノ月」。

石に向って歌をよむなどということは、この坊様には、朝飯前のことで、島に手紙を出しております。これも紀州にある苅磨島という、しばらくの間修行していた島なのであるが、その島に手紙を出した、宛名は島殿とある。御無沙汰をしているがその後お変りはないか、桜のころになったが、貴方のところの桜が思い出されて、恋慕の情止み難いものがある。物言わぬ桜に文をやれば物狂いと世人は言うだろう。ここで上人は面白い言葉を使っている、「非分ノ世間ノ振舞ニ同ズル程ニ、乍思ツツミテ候也」、非分というのは物の道理を弁えぬという意味だ、どうせ理窟のわからん世間だ、仕方がないと我慢していた、というのです。ところが今はもう我慢がならぬ、「物狂ハシク思ハン人」こそ本当の友達にすべきである。衆生を摂護する身で傍の友の心を守らぬとは心ないわざである、取りあえず御機嫌を伺うこととする、「併期二後信一候、恐惶敬白」——弟子が驚いて、どなたにお渡しすればよいかと聞くと、何、島のどこかに置いてくれればよいと答えた。そういう伝記を心に思い浮べて、明恵上人の画像を見ると、この大自然をわがものとした、いかにも美しい人間像が、観というものについて、諸君に言葉以上のものを伝えるはずであります。

明恵上人の大先輩に恵心僧都という人があった。一体、仏教の思想がわれわれ日本人の生活の表現である美術や文学のなかに本当に滲透して来たのは平安も中期以後のことでありますが、恵心はこのころの代表的思想家であって、このころの日本の文化を知るためには、この人の主著「往生要集」を読むことが、どうしても必要である。仕方がないから読むには読むが、何分にも浅学であ

るから、この中に充満した死語を生かして読むだけの力がない。しかしそれにしても、この書に現われた地獄や極楽の有様を叙したところなどは、古い教典の引用を巧みに塩梅したものですが、異様に鮮明な印象を与える一種の名文であって、著者の観法というものの強さ烈しさが自ら感じられるように思われるものであります。また、この人は立派な仏画を遺している。申し上げるまでもないが、高野山にある、あの驚くべき二十五菩薩来迎図であります。阿弥陀様が、管絃歌舞の聖衆を引き連れて、光り輝く雲に乗り、欣求浄土を念ずる臨終の人間のために来迎する。これはいわゆる来迎芸術というもののうちで最も優れたものであるが、絵の構想は、微細にわたって往生要集の中に記されている。即ち恵心の心にまざまざと映じたがままの図に相違ないのであります。今日でも、死人は北枕に寝かすという風習はあるが、当時の人は、臨終の覚悟をするために北枕して寝たのです。顔を西の方に向け、阿弥陀様の像を安置して、阿弥陀様の左の手に五色の糸をかけ、その端を握って浄土の観を修したのである。意識不明の患者にカンフルを注射するのと比べるとよほど高級な風習です。来迎図というものが盛んに描かれるようになって、仏像の代りに来迎図をかけるようになった。恵心僧都は、この種の来迎図の創始者ということになっておりますが、まあこれは伝説に過ぎないかも知れない、恐らく、今はもう名も伝わらぬ傑れた絵仏師の作でありましょう。絵仏師というのは僧籍にある絵師をいうのですが、これは、僧でありながらたまたま画技にも長じていた人という意味ではないので、当時は僧籍にあることは絵師として大成するには大事な条件であった。また逆に密教の場合などでは、画技に長じていることは僧となるためのほとんど必須の条件だったのであります。まあ、当時の絵仏師の実際の状態がどういうものであったかという問題になると難かしいことになるでしょうが、ああいう優れた来迎図が、僧と絵師との根本的な一致、観法即ち画法であったということを明らかに語っているところに注意したいのであります。申すまでもなく画家は、眼が生命であるから、見るということについては、常人の思い及ばぬ深い細かい工夫を凝らしているものであって、ついに視力というものが、そのまま理論の力でもあり思想の力でもある、という自覚に到達しなければならぬはずのものである。このような認識の性質は、観法の性質にすでにあることは、前にお話した通りでありますが、この画家の目覚というものは、絵をかくという行為を離れては意味をなさぬというところに注意すると、観という言葉にまた新しい意味合いが生じて来るのである。絵かきが美を認識するとは、即ち美を創り出すことである。同様なことが観法にもある。

念仏と見仏とは同じことである。仏というアイディアを持っただけでは駄目だ、それが体験出来るようにならなくてはいけない、ということは、日常坐臥、己れの体験に即して仏を現わさねばならぬ、創らねばならぬということになる。そういう意味合いが観という言葉にはあると解してよかろうと思うのです。

源平の大乱による藤原貴族の没落は、一般の生活人にも非常に暮しにくい時代をもたらしたのですが、この機に当って、法然や親鸞の宗教改革運動が起ったことは周知のことである。こういう新宗教は、末法の世に生れた凡愚の身で、自力に頼って見仏に至るなどとは不可解不可能なことだとします。「もし我ら当時の眼に仏を見ば魔なりとしるべし」という考えであって、この宗教運動が否定したものは、これまでの仏教の、単に審美的傾向というようなものではなく、自力を頼んだ観法そのもの、人間の自己表現そのもの、仏のなかに自己を見るというような高級な自己表現さえも、魔道として痛烈に否定し去ったのであります。時代相を看破した天才等の頭に宿ったかような思想は、もちろん、形式化した宗教に新しい生命を吹き込んだのであるが、こういう厳しい純粋な宗教的智慧は、美術の誕生にはなはだ不都合なものだ。そもそもの動機の上から審美的智慧とは反目するものである。事実、新宗教は、非常な勢いで拡がったが、ほとんど創始者の深い思想には関係ない勢いで拡がったが、優れた美術は今日に至るまでついに生み出さなかったのであります。しかし文化の流れというものは、複雑なものであって、観法の伝統は、新しく宋から這入った禅宗が受けつぐことになりました。禅宗は、御承知のように「直指人心見性成仏」*と言って、徹底した自己観察の道を行くのであります。「不立文字」ということを強調するが、これは言語表現の難かしさに関する異常に強い意識を表明したものであって、自己表現の否定をいうのではない。言語道断の境に至って、はじめて本当の言語が生れるという、はなはだ贅沢な自己表現欲を語っているものだと考えられる。教理論化したお釈迦様の菩提樹の下の禅観に新しい命を吹き込んだこの運動は、当初の緊張状態が過ぎて次第にゆとりが出て来るようになりますと、当然その内部から芸術表現を生むようになる。それが、わが国の美術史の上で非常に大切な室町の水墨画となって完成するのであります。画家はやはり僧籍にあった。画僧といわれているのがそれである。今日から考えると、よほど妙なことに思われますが、こういう画僧たちは、ただただ舶載された宋元画、これを画本と言っていたが、この画本だけを虎の子にしていた。誰も支那に行ったことはない。実地にモデルに出会ったことはない。行ったのは雪舟くらいなものでしょう。それもわずか一

年余りの旅行です。画論などというものも当時どれだけ行われていたか、はなはだ覚束ないもので、ただめいめい勝手に画本を賞玩し、模倣して、ついにあれだけの画業をなした。これは驚くべきことでありまして、どこの国のいつの時代の風景画家にも、このような芸当をやり遂げたものはないのであります。彼らの画業と、異国の先輩たちの画業との優劣が問題なのではない。山水は徒らに外部に存するのではない、むしろ山水は胸中にあるのだ、という確信がもし彼らになかったなら、何事も起り得なかったというところが肝要なのである。彼らには画筆とともに禅家の観法の工夫があった。画筆をとって写すことの出来る自然というモデルが眼前にチラチラしているなどということは何事でもない。自然観とは真如感ということである。真如という言葉は、かくのごとく在るという意味です。何とも名づけようのないかくのごとく在るものが、われわれを取り巻いている。われわれの皮膚に触れ、われわれに血を通わせてくるほど、しっくり取り巻いているのであって、どこそこの山が見えたり、どこそこの川を眺めるというようなことではない。これを悟るには、精神の烈しい工夫を要するのであって、支那に出かけて行けば、確かに支那の山水に出会えるというだけの話であれば、日本にいれば日本の山水にしか出会えないでしょう。それは自然という「かくのごとく在るもの」に出会うことではない。要するに、室町水墨画の優れたものは、自然に対する人間の根本の態度の透徹は、外的条件の如何にかかわらず、いかなるものを表現し得るかということを、明らかに語っているのであります。

観法というものが、文学の世界にも深く這入って行ったのも無論のことであって、その著しい例が西行であります。前にお話した明恵上人の伝記を書いた喜海という人の伝えるところによると、ある時西行がこういう意味のことを明恵上人に語ったのを、傍で聞いたことがあるという。自分が歌を詠むのは、はるかに尋常とは異なっている。月も花も郭公も雪もおよそ相あるところ、皆これ虚妄ならざるはない。分りきったことである。であるから、花を詠んでも花と思ったこともなければ、月を詠ずるが実は月だと思ったことはない、「虚空ノ如クナル心ノ上ニオイテ、種々ノ風情ヲ色ドルト云ヘドモ更ニ蹤跡ナシ」と言ったという。歌を詠んでいるのではない、秘密の真言を唱えているのだ、歌によって法を得ているのだ、さような次第で歌と言っても、ただ縁に随い興に随い詠み置いたまでのものである、そう言ったそうです。

仏教の思想を言うものは、誰でも一切は空であるという、空の思想を言います。なるほど、大乗仏教思想の発

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.